

# 第13回大会 盛会のうちに終了!

## キリスト教礼拝音楽学会 第13回大会報告

藤澤眞理

2013年5月25日(土)東京三鷹市にある国際基督教大学(ICU)本館4階402教室および宗教音楽センターにて本学会第13回大会が開催された。当日は好天に恵まれ、大樹に茂る若葉と芝が青々と輝くICUのキャンパスを歩くのは実に清々しかった。

しかし筆者はICUのキャンパスの広大さを事前に知らず、最初のゲートから行けども校舎らしき建物が見えない事に非常に焦りつつ、結局10時の開始時刻に20分近く遅れて会場である本館402教室にたどり着いた。したがって筆者が入場した時には金澤会長の挨拶も終わり、最初の発表者佐々木悠氏の研究発表が既に始まっていた。

更に、この大会報告を書くよう依頼されたのは、本館4階宗教音楽研究所に会場を移して開催されたシンポジウムの開始直前である。実に楽しく発表を拝聴していた、午前の佐々木氏とその後の安積道也氏の研究発表、そして、前述の金澤会長の開会挨拶は大会終了後に渡された録音を頼りに文章化したにすぎない事をご了承願いたい。

### 会長挨拶

金澤正剛会長の出身校であり、その後長期に渡って教鞭をとられた国際基督教大学キャンパスと本館4階にある402教室、および隣接する宗教音楽研究所の60年余りの歴史と変化を紹介しながら、今回も全国から多数の参加者があったことに感謝し、また次回大会は北海道を予定している事を表明された。

### 研究発表 『ドイツにおける 教会音楽教育』

続いて午前の部では佐々木悠・安積道也両氏による研究発表が行われた。

両氏の発表は、日本における教会音楽の厳しい実態の理由のひとつに、教会音楽の指導者の指導力の低さがあること、また優れた教会音楽指導者を育成する専門機関が殆ど無い上、指導者として必要な教育カリキュラムが整備されていない事に原因があることを指摘。ドイツの教会音楽指導者はどのように育成されているのかを、佐々木氏は教会音楽教育に使用されている、第2次大戦前1930年から2009年までに刊行された教科書9冊の内容を紹介し、それらの教科書の内容の変化を元に検証していこうという発表である。

また安積氏は教会音楽家の中で、聖歌隊指導者に限定し、氏が実際に留学していたドイツのシュトゥットガルト国立音楽芸術大学とフライブルグ国立音楽大学2つの大学の聖歌隊指導者のためのカリキュラムと授業内容を紹介し、ドイツの合唱指導者教育の現状を参考に今後の日本の教会音楽育成のあり方を考察しようという発表内容である。

### 1 「ドイツの教科書の実体」 佐々木悠

はじめにこの研究発表を行うに至った動機として、佐々木氏が教鞭をとる広島のエリザベト音大の宗教音楽専攻の学生、オルガン専攻の学生の減少、伝統ある宗教音楽学科の廃止に至っ

た経緯と現状が報告される。さらにその減少原因が単に少子化の影響だけではなく、宗教音楽教育そのものが社会環境と時代の急速な変化に追いついていないことにあるのではないかと指摘した。

そこで戦前から現代まで、激しい時流に吞まれつつも進化を遂げていったドイツの教会音楽教育を、教会音楽家資格取得試験を踏まえドイツ国内で出版された教科書9冊を比較研究することで、日本の今後の教会音楽教育のあり方を模索しようという主旨が説明された。

ドイツでも現在、教会に通う信徒の激減によって教会自体の統廃合が行われ、その経済的理由から、かつて1919年にカール・シュトラウベが提言し、1945年以降実施されていたA~Cランクに格付けされていた教会音楽家資格試験の体系が崩れた。そして、教会音楽家の給与削減や、あるいは職自体のリストラが行われているとの厳しい現実も併せて紹介された。

佐々木氏は、まずドイツ国内で出版された教会音楽家のための教科書の定義を、「コントロールを目指す者が、上記の教会音楽家資格取得のための試験に必要な科目の最低限の知識を総合的に記したものに限定される」とした。そして以下の教科書について、その中身と成立背景について説明を行った。

- ① Weizel, W. 1920?/1930. *Führer durch die katholischen Kirchenmusik der Gegenwart*. Freiburg.  
特徴：1920-1930年に出版された教会音楽に関する書籍やミサ曲のリスト。
- ② Mosel, H. J. 1954. *Die evangelische Kirchenmusik in Deutschland*. Berlin-Darmstadt.  
特徴：ベルリンおよびワイマールの教会教育機関で教えた経験を綴っているおり、後の教科書の指針になった。
- ③ Valentin, E. ed. 1967. *Die evangelische Kirchenmusik*. Regensburg.  
特徴：ミュンヘン音楽大学教会音楽科教員たちによる共同執筆のハンドブックで、教会音楽家試験と制度についての詳細な記述がある。
- ④ Stern, H. 1969. *Leitfaden zur Grundausbildung in der evangelischen Kirchenmusik*. Neuhausen-Stuttgart.  
特徴：ヴュルテンベルク州の福音主義音楽家連盟と合唱連盟が依頼し、作成された。
- ⑤ Musch, H. 1975. *Musik im Gottesdienst*. Regensburg.  
特徴：カトリック教会側の教科書で、第2バチカン公会議の影響を受けている。
- ⑥ Bauer, S. 1996/1998. *Probieren und Studieren*. Stuttgart.  
特徴：エキュメニカルな視点で書かれている。
- ⑦ Opp, W. ed. 2001. *Handbuch Kirchenmusik*, 3 vols. Kassel.  
特徴：ハイデルベルク教会音楽大学教授陣による執筆で、神学と礼拝に関する詳しい記述がある。
- ⑧ Bönig, W. 2009. *Musik im Raum der Kirche*. Stuttgart.  
特徴：福音主義教会とカトリックの教員が合同で執筆し、タイトルに初めてエキュメニカルという言葉が記されている。
- ⑨ Mailänder R. ed. 2009. *Basiswissen Kirchenmusik*. 4 vols.

Stuttgart. (以下BK)

特徴：カラー印刷全4巻本で、DVD・年表・讚美歌集の対照表が付いている。福音主義教会とカトリック教会の初めての合同教科書で、49人で執筆。オーストリア、スイスのスタッフも編集に参加している。

佐々木氏は、教科書の歴史を概観したうえで、さらに最近出版されたBKの内容とそこから見える21世紀の教会音楽家の姿について考察を行った。それによると、このBKの目的は、(1)実践的な教会音楽を教える、(2)福音主義教会・カトリック両方の歴史を学び理解する、(3)ポピュラー音楽(ジャズやロック)を導入し、教会離れが進むドイツの若者を取り込んでいく、といことに集約される。そして、BKから読み取ることができる21世紀における教会音楽家の姿は、(1)伝統の継承、(2)現代文化の受け入れ、(3)専任職から副業職への移行、ではないかと述べた。最後に氏は、日本における教会音楽教育は、その後の就職先がないことを考えると、音楽大学での専門教育よりも、一般大学の教養教育において可能性を持っているのではないかと結び、若者に教会音楽の魅力を教えて行く方策を考えるべきだと述べた。更に、「教会音楽アプリ」の開発等、若者向けの新たなアプローチを行っていく必要があるであろうという提案がされた。

## 2「合唱指導の実際」 安積道也

### 1) 日本の合唱指導の問題点

ドイツでは「合唱指導者 Chorleiter (合唱団を導く人)」、日本では「合唱指揮者 (指揮を振る人)」という名称の違いに代表されるように、役割の認識が違っているのではないかと述べた。日本の合唱指揮講座はだいたい指揮法から入るが、現実的に譜面が読めない合唱団に対し指揮法は全く通用しない事を、安積氏個人の経験から解説。それ以前、つまり合唱団が譜面から目を離し、指揮者を見るまでの初歩的な合唱訓練の指導法こそが大変重要であるのに、それを教える機会が欠落していることを指摘した。

日本では合唱指導者を養育する音楽大学などの機関少なく、合唱指導者がまだまだ専門領域として認識・確立されていない事が原因の一つと思われると述べた。

### 2) 合唱指導者の具体的作業とは何か?

- 譜を読む：曲の解釈をおこない、合唱団なしに理想の響きを想定する能力。
- 聴く：合唱団の現状把握の能力。理想の響きからどれだけ外れているかを判断する。
- 指導する：問題点の指摘、課題を与え、理想の形に近づけ鍛えていく、トレーナーのような役割。
- 演奏する：楽音を自ら出さずに理想の音を引き出していく。他にオーガナイザーとして合唱団を演奏に導く練習計画を立案したり、練習場の確保や会計資金調達に至るまで、とても雑多な仕事がたくさんある。

### 3) 問題点 (合唱指導初心者の失敗例) 現状と原因

【合唱団の現状】	【合唱指導者側の原因】
・声(特に高音)が出ない	正しい発声法の知識がない
・合唱団員たちは音が取れない	ソルフェージュ能力をトレーニングできない
・合唱団員が家で練習して来ない	適切な課題を与えられていない
・選曲した曲が歌えないと言われた	現状把握の甘さと指導力の弱さ
・本番に間に合わない	現状把握と練習計画等の甘さ

### 4) ドイツの合唱指導者育成の現状

ドイツの音楽大学には教会音楽科があり、職業として存在し、給料が支給され各種保障や年金も支給される教会音楽家を育成するカリキュラムが確立されている。教会音楽家教育の柱は次の3つである。

1. 理論 (作曲含む)
2. オルガン (オルガン即興演奏含む)
3. 指揮 (オーケストラ指揮・指導法を含む)

まず具体例として、シュトゥットガルト国立音楽芸術大学教会音楽科の学部生用カリキュラム (8セスター4年間) の表をもとに教育内容が説明された。同大では毎週45~60分の個人レッスン、グループレッスンが多数用意されている。個人レッスンの内容は、オルガン、オルガン即興演奏法、ピアノ、通奏低音、声楽、発音、合唱指揮法、管弦楽指揮指導法等と多彩であり、おおよそ合唱指導者が実際に行う仕事に必要なと思われる事項が網羅されている。特に3年生になると音楽教育科と合同でオーケストラと合唱団を編成し、交代で指揮・指導の実践的訓練が出来る。4年生ではオーケストラ伴奏つきオラトリオを指揮する機会が与えられる。また事前の指導を受けた後、曲によっては児童合唱の指揮・指導も実習できるなど、大変に優れたカリキュラムによって教会音楽指導者の育成がなされている事を紹介した。全カリキュラムのうち週に8時間が合唱関連の授業が充てられる。

次にフライブルク国立音楽大学の例を紹介。合唱関連の授業の割合はシュトゥットガルト芸術音楽大学とほぼ同じであるが、フライブルクは学生数が少なく、大学の規模が小さいため、大規模な合唱団を組織することができない。そのためごく限られた曲を取り上げられるのみであった。管弦楽指揮法の授業も、オーケストラは2管編成が組めず、管弦楽法の専任教授がいないため、合唱指揮の教授が兼任。授業も不定期であった。オーケストラを振る知識経験が少ないまま、試験に臨まなくてはならない問題が生じていた。

また、若者向けのポップス・ジャズの実習も充分とはいえず、経験不足のままに現場に出て、大変苦勞している教会音楽家たちも多い。こうした経験の浅い教会音楽家たちの抱える問題点を網羅している手引書が、佐々木氏の研究発表の最後に紹介された教科書『Basiswissen Kirchenmusik』である。第2巻は、音大合唱指揮教授・講師・実績のある教会音楽家・合唱指揮者などによる共著で、序文には音楽大の教育音楽科の学生・副業的教会音楽家・アマチュアの合唱指導者のための入門書であることが明記されている。(初歩的基本情報が主)

第2巻の内容は以下である。

1. 合唱指導法
2. 指揮法 (DVDの画像にて解説)
3. 合唱用ヴォイストレーニング (生理的側面の解説・変声期の対処法等)
4. 合唱団の立ち位置 (男声が少ないときの並び方等を図解)
5. 合唱指導の実例 (A. ベッカーのアカペラ作品の実践的練習方法)
6. グレゴリオ聖歌の指導法 (ネウマ譜の解説)
7. ポピュラー音楽の合唱指導法
8. 合唱と器楽のための音楽 (オラトリオ作品の指導法)
9. カントールの実践 (アレンジ等含む)
10. 教会音楽の分野別作品リスト
11. 児童合唱指導の概要 他に合唱離れに対する対策等。バンドの演奏活用法。高齢者と歌うときの注意点等。

### BK1. 合唱指導法の内容

#### 5) 練習に入る前の準備と実際の合唱指導

ここで「いつくしみふかき」を例に安積氏の新曲の練習方法が説明された。

教育実習の指導案に似たものを作成し、練習内容と予定時間を明記する。

新曲の導入部分における具体的注意点と手順

- ・「余計なうんちく」はたれない。
- ・ピアノで一度通して弾く（なるべく音楽的に、第一印象が大事）
- ・合唱団はハミングで、次に Lololo で歌う。和声を付けて、譜読みの邪魔をしない。  
外国語など発音練習を伴う場合はリズム練習とともに行うのが有効である。

#### 6) 今後の合唱指導課題

合唱指導者は多かれ少なかれ精神的孤独感を持っている。合唱指導者の横の繋がり、情報交換は大変有効である。問題は共有して解決策を共に考える。指導法技術の向上に努めるため、合唱指導方法を教える講習会等の開催が有効な手段であると結論付けた。

両氏の研究発表後に質疑応答が行われた。ドイツの教会音楽家教育制度に対する質問が集中し、会員のこういった問題点の共通認識と関心の高さがうかがわれた。

## 総 会

昼食をはさんで、総会が開かれた。2012 年度の活動・会計・監査報告が、手代木俊一氏、佐々木しのぶ氏、塩谷栄二氏によりなされ、承認された。

2 年毎に行う役員改選であるが、当選者のうち塩谷氏が辞退し、佐々木悠氏を新たに選出されて、あわせて 10 名が新役員として選出された旨報告があり承認された。

続いて 2013 年度活動・会計計画が発表されたが、新役員のうち 3 名が地方の会員であるため、役員会時の交通費を 18 万円に増加するよう提案され、その補正予算が承認された。

参加者 21 名

議長：金澤正剛 副議長：伊東辰彦 会計：佐々木しのぶ  
監査：塩谷栄二

## シンポジウム

午後は宗教音楽センターの草刈オルガンを正面に 3 人のパネリストによるシンポジウムが開催された。まずひとり 20～30 分のコメントがあり、続いてディスカッションが行われた。コメントの概要は順に以下のとおりである。

### 1. 「教会とオルガン会社の契約・交渉」

赤井 励（当会員、日本リードオルガン協会顧問）

もともと築地にかつてあった聖三一教会は関東大震災を機に青山に移転。昭和 2 年にパイプオルガンを設置する事になる。カナダのカサバン社と契約するにあたり、同社よりイーゾーオーダーの 117 番型オルガンを推奨される。細かなオプションや変更にともない、当初 \$6,000 だった価格は \$8,000 に跳ね上がる。ストップ 8 フィートが多く、リードはほとんど無し。面白みが無い「静かな音色」のオルガンであったことは、リストを確認することで窺い知れる。9 月にチャップマンという技師が来日し、パイプが 1 本無くなっているなどのトラブルに見舞われたものの、英語の通じない日本人の人手一人を助手に付け、一ヶ月余で組み立て上げた（10 月 13 日に検査が行われている記録あり）。17 日には木岡英三郎氏によって披露演奏会が行われている。結局このオルガンは十数年後空襲により焼失してしまう。他に北海道第 1 号のパイプオルガン、北大のオルガンの設立にあたる秘話も明かされ、オルガン導入には苦勞とトラブルが付き物であると結んだ。

### 2. 「オルガンと音響」 永田 穂（非会員、音響設計士）

音響設計の立場から、主に教会における音響装置に対する注

意点の指摘およびアドバイスが中心であった。氏の挙げた問題点、注意点は以下のとおりである。

- \*マイクの角度が問題。口に対してほぼ直角に向けるのが正しい。
- \*多くの教会がスイッチをオン・オフにするだけで、細かな音量調整等をしないのは間違いである。
- \*話者の言葉が聞きにくい。教会の（あるいはホールなどでも）中央部にいると言葉が聞き取りにくいという現象が起こる。それを認識しておく事が大切である。
- \*高齢者対策

- i トイレに行きやすい入り口付近に高齢者席を設け、その付近のスピーカーを設け聞き易くするなどの工夫が必要。
- ii 高齢者は、補聴器によりマイクのハウリングが起こる。理想的なのはマイクを口に、聞き取りにくい場合は、各自イヤホンを耳にすることが望ましい。

他に三越のオルガンや、氏が音響を手がけた旧 NHK ホール（新橋）のなど、日本における西洋音楽が急速に普及していった時代の話が語られた。

### 3. 「合唱とオルガン 聖公会の場合」

長畑俊道（非会員、立教小学校教諭）

実際は「聖公会の礼拝における声と音」と読み替えて進められていった。内容は「礼拝の場を考える」事と、「聖歌の翻訳」についての問題点について語られた。

#### a. 声の場としての礼拝音楽

『日暮れて闇深まり』を例に、歌詞の意味が会衆の各々の状況や経験によって様々に捉えられる。作者の歌詞の意図は会衆によってその解釈も変化する。歌い方も変わってくる。

#### b. 言語活動としての礼拝 声とオルガンとの役割

「歌うことは二倍の祈りである」、「知るということは自分の内面が変革されることである」（聖アウグスティヌス）は、唱える祈りから歌う祈りへの活動の変化である。またラテン語 Dicere と Cantare のニュアンスの解説、唱えると歌う行為の違いを考察。オルガンの前奏から記憶を呼び覚ますことが聖歌にとって重要。またオルガンにおける回顧・記憶という機能は伝統・習慣と強く結びついていく。

#### c. 翻訳聖歌の歌う場（文字という因子を加え）

ルターがトマス・ミュンツァーの行った不自然な填詞聖歌に激怒し、ラテン語聖歌にドイツ語を詰め、ドイツ語のアクセント抑揚に従って改変していった経緯を例にあげ説明。

#### d. 言語認知の違いを前提に、同一性幻想を解体することが、文化の翻訳前提条件であると結ばれた。

#### e. 明治期の翻訳聖歌について、

明治期、初期の聖歌は、日本語をほとんど話せない外国人宣教師と日本人が共に英語で歌っていた。その後、聖歌は誤訳等が修正され、現在のものへと改変されていった経緯が語られた。

その後のディスカッションではオルガンの設置・管理・維持の諸問題に集中した。

他に音楽合唱指導における神学的アプローチをどう行なうかなどの意見が出された。

### 会長閉会挨拶

今後も会場を全国規模で展開して開催していこうという提案をもって閉会した。

（当会員、玉川大学準教授）

▶受け付け風景(手代木副会長)



▶総合同会の伊東辰彦氏



◀金澤会長の挨拶



▶安積氏の発表風景



◀午前のセッションで佐々木氏、安積氏への質問



▶総会風景



◀草刈製オルガン



★テーマ 礼拝におけるオルガンと合唱の実践  
 ★日時 2013年5月25日(土) 10:00-16:30  
 ★会場 国際基督大学  
 ★プログラム

9:30 - 受付  
 10:00 - 10:05 ご挨拶  
 10:05 - 研究発表「ドイツにおける－教会音楽教育－」  
 質疑応答  
 休憩  
 12:00 - 12:30 昼食会、自由行動  
 13:30 - 14:00 総会  
 14:00 - シンポジウム

「教会とオルガン会社の契約・交渉」  
 「オルガンと音響」  
 「合唱とオルガン 聖公会の場合」

16:30 会長閉会挨拶

総合同会 伊東辰彦  
 会長 金澤正剛

① ドイツの教科書の実体 佐々木悠  
 ② 合唱指導の実際 安積道也

赤井 励  
 永田 穂(音響設計士)  
 長畑俊道(立教小学校教諭)  
 金澤正剛





## ピストイアのオルガンウィーク

金澤正剛

今年（2013年）の夏、第2回のオルガンウィークがフィレンツェ近郊のピストイアで開催された。すなわち7月17日から24日にかけての8日間に、ピストイア周辺に存在する数多くの歴史的オルガンを見学するだけでなく実際に弾いてみようという企画である。参加者は10人と少数ではあったものの、かえって十分弾く機会に恵まれ、期間中には3回の演奏会も行い、地域の人々との交流もあって、全プログラムをたっぷり満喫することが出来た。さらに参加者の中には7月25日に行われたピストイアの守護聖人聖ヤコポの祭りにも参加し、中世以来伝統の槍騎馬試合を楽しむ人たちも居た。

実はこの企画、主催はピストイアに事務所のあるゲラルデスキ協会であるが、ピストイア市と岐阜県白川町（有名な飛騨の白川郷ではなく、岐阜県南部の美濃白川）の共催によるもので、その背景にはこの2つの町の40年近い友好関係がある。事の発端は美濃白川に工房を持つオルガン建造家辻宏さんが偶然ピストイアの町を訪れ、1台のオルガンに目をとめたことにある。弾かせて貰えないかと尋ねたところ、壊れていて音が出ないという。自分がオルガン建造家であることを説明し、許可を得て修復したところ、素晴らしい音色がよみがえった。その楽器に魅せられて、帰国後そのコピーを作成し、岐阜県立美術館に設置することとなったが、その弾き初め披露式に招かれたのが、ピストイアの聖イグナツィオ教会の司祭であり、オルガニストでもあるウンベルト・ピネスキ教授であった。

この時ピネスキさんと辻さん、それに白川の町長の間で、当時辻さんが製作中であつたもう1台のイタリア型オルガンを使って、イタリアのオルガン音楽を普及させるような行事を企画しないかという提案が持ち上がった。こうして1985年4月に、ニューイングランド音楽院教授の林佑子さんも参加して第1回の白川イタリアオルガン音楽アカデミーが開催され、以後今日に至るまで毎年20数名の参加者を集めて続けられている。またそれがきっかけとなってピストイア市と白川町の交流も進み、互いに十数名の青少年を招いてホームステイさせるなどの企画も繰り返された結果、1994年には正式に姉妹都市の提携を交わすことともなった。

一方辻さんはその後もイタリア型オルガンを造りつづけたが、彼にとっては最後の製作となる白川町民会館のグローリア・ホールのオルガンの完成を目前として天に召されてしまった。それでも現在白川イタリアオルガン音楽アカデミーでは、グローリア・ホールのオルガンと、辻さんが1988年に完成させた「緑のオルガン」を用いて講習が続けられている。ただしこれらの楽器はイタリアのオルガンの特徴を伝えてはくれるものの、オリジナルではない。そこでふと、毎年講師として来日しているピネスキさんの頭に浮かんだのが、白川の受講生たちに本物のイタリアの歴史的オルガンを聴くばかりでなく、実際に弾いてみることによって、イタリアのオルガン音楽の心髄に触れて貰えることが出来るのではないか、ということであった。

そこで2012年7月に「イタリア・トスカナ地方の歴史的オルガンを訪ねる旅」を企画したところ、定員を超える22名の参加者を得て、内容の濃い1週間のプログラムを行うことが出来た。最初この企画は1度だけというつもりであったが、あまりにも好評で、しかも地元のオルガン愛好者たちの反応もあって、改めて「オルガンウィーク」の名のもとに、第2回目を行うこととなった。今回は最終的な企画の決定が遅れたり、2度目でもあったことから、参加者は前回の半分ということになったが、結果的にはすべての参加者が心から満足するような

ものになったと思う。

今年の7月17日（水）午前10時に参加者たちはピストイア市の中心部に位置する聖イグナツィオ教会に集合し、ピネスキさんと、もう一人の講師で同教会のオルガニストを務めるアンドレア・ヴァンヌッキさんから、以後一週間のスケジュールの説明を含めてのオリエンテーションを受けた。ところでこの教会は、16世紀後期にこの町の最初のイエズス会の教会として建てられたという背景がある。従って最初その名も「聖イグナツィオ・デ・ロヨラ教会」としたわけであるが、その後イエズス会がこの町から撤退したため、教会の名前も「サント・スピリト（聖霊教会）」に変更された。ところが最近になってローマ教皇庁の意向から、元の「聖イグナツィオ」に戻ったが、「サント・スピリト」の名は今もって、教会前の広場の名称として残っている。

この教会に入ると、左右2つのバルコニーにそれぞれ1台ずつのオルガンが設置されている。左側のオルガンはヴィレム・ヘルマンによって1664年に設置された歴史的オルガンであるが、右側のそれはその歴史的オルガンに合わせて、現在ルッカで活躍中のグラウコ・ギラルディによって製作された楽器である。実は近年になってヘルマンのオルガンを修復したのもギラルディさんであった。従って右側のオルガンを製作するにあたって、左側のオルガンの特徴を念頭に入れてのことであるので、この2台のオルガンによる2重奏はまさに理想的といってよい結果をもたらす。

実はこのヘルマン作のオルガンは、ピストイアばかりでなく、イタリアの歴史的楽器としても極めて重要な楽器として注目される。ヴィレム・ヘルマン（1601-83）はネーデルランドの出身で、30歳の時にメヘレンのイエズス会に加わり、オルガン製作者として、以後特にイエズス会系の教会のためにオルガンを製作するようになった。その後彼はフランスを経てイタリアに渡り、1648年にはジェノヴァのイエズス会を拠点として活躍を続け、北はコモから南はローマ、さらにはパレルモに至る広範囲の地域で、約80台のオルガンを製作したとされるが、残念なことに完全な形で現存するのは聖イグナツィオの楽器と、ウンブリア地方に残る小型オルガンの2台だけであるという。ただし彼は弟子を育成することにおいても重要な功績を残し、アガーティ家とトロンチ家で代表される今日ピストイア系の名で知られるオルガン製作の伝統を残したことが注目される。従来イタリアのオルガンと云えば、アンティニャティ系の北イタリアのオルガンがあまりにも有名であるが、ピストイア系の楽器はそれとは異なる、ネーデルランド系の特徴を含んでいるところに、独特の持ち味を持っているわけである。例えば聖イグナツィオ教会の楽器は、現存するイタリアのオルガンの中でリード管を持つ最古のオルガンであるという。

ところでピストイアとその周辺には、このヘルマン作の楽器以外にも素晴らしい歴史的オルガンが数多く残っている。まずは日本出身の小西久美子さんがオルガニストを務める聖フィリッポ教会のオルガン（D.カチオリ、A. & F.トロンチ共作、1745年）は、かつて辻さんが目をつけて、最初に修復した楽器である。さらにピストイア大聖堂には1793年作のトロンチ・オルガンが、すぐ近くのカルミネ教会には1840年作のトロンチ・オルガンがあり、これらはすべてオルガンウィークの期間中、いつでも参加者が弾けるように提供されていた。考えてみればまったく贅沢な話である。

さらにオルガンウィーク中、2度にわたるエクスカージョンが企画されたことも素晴らしかった。特に3日目の金曜日は、午前中古都ルッカのオルガンを見学した後、ギラルディさんのオルガン工房を訪ねて、製作中の楽器を見せて貰った。そして午後は「ピノキオの生まれ故郷」として知られるコッローディ

の町の教区教会において、ミケランジェロ・クルデッリ作のオルガン（1762年）で練習した上でコンサートを催したところ、町中が聴きに来てくれたばかりでなく、手作りの料理やワインでパーティーを開いてくれるという、実に楽しいひと時を用意してくれた。また月曜日の午後には山を越えてポローニヤ近郊まで足を延ばし、バルジという町の山の頂上にそびえる聖ジャコモ教会のピエトロ・アガーティ作のオルガン（1789年）で演奏会を行った後、湖畔のレストランで夕食を楽しんだ。

このように充実したプログラムの企画であったため、気付いてみると8日間があつという間に過ぎていたという結果となった。こうした好評なプログラムは今後も続けようということになり、第3回オルガンウィークを2014年7月18日（金）から

24日（木）にかけて行うことも決まった。それはちょうど美濃白川のオルガン音楽アカデミーが30周年を迎える年にあたり、またピストイアの歴史的オルガンに修復が完了する予定の楽器もあるということで、好評だったエクスカージョンも3回に増やして、さらに充実したプログラムになる予定である。また今回からはオルガニストばかりでなく、オルガンを見学して聴くだけの一般のオルガン音楽愛好家にも門戸を開こうということにもなった。興味のある方には資料をお送りするので、受付担当の金澤正剛（Mail address: kanazawa@icu.ac.jp、またはFAX: 03-3815-7098）にまでご連絡いただきたい。

（当学会会長）

## ★2011年度総会報告

第1号議案 2012年度事業報告および2012年度収支決算の件  
第2号議案 2013年度事業計画および2013年度収支予算案の件  
第1号議案、挙手による採決により、賛成多数で承認。  
第2号議案の交通費については、以下のような提案が出された。  
一役員改選により、遠方の役員が3名となった。全体の予算に余裕がでてきたので、交通費の予算を¥180,000ほど計上できるのではないかと。  
審議の結果、第2号案の収支予算書の予備費より、交通費を提案通り計上することにし、賛成多数で承認された。

## ★新役員(得票順、敬称略)

手代木俊一、金澤正剛、佐々木しのぶ、伊東辰彦、  
新垣壬敏、植木紀夫、E.ヘンゼラー、赤井励、塩谷栄二、  
安積道也、佐々木悠  
(2013年8月に、E.ヘンゼラー氏から退会届が出され、役員会で承認された。)

## ★役員会報告

- ①日 時：2013年5月11日(日) 14:00-15:30  
場 所：立教大学セントポール会館  
出席者：赤井、新垣、伊東、植木、金澤、佐々木、手代木  
議 題：・第13回大会の詳細な打ち合わせ  
・学会誌、ニュースレター
- ②日 時：2013年8月8日(日) 14:00-15:30  
場 所：立教大学セントポール会館  
出席者：赤井、新垣、伊東、植木、金澤、手代木  
議 題：・第13回大会報告  
・第14回大会の会場決定  
・ニュースレター、学会誌  
・学会誌第1-12号の在庫・保管について
- ③日 時：2013年10月13日(日) 14:00-15:00  
場 所：池袋芸術劇場内喫茶  
出席者：赤井、新垣、伊東、植木、金澤、佐々木、手代木  
議 題：・第14回大会のテーマ等

## ★学会誌発行予定

### 第13号 学会誌……4月半ば刊行予定

内容・巻頭言……金澤正剛  
・論文……手代木俊一、鈴木治、植木紀夫、  
佐々木悠  
・エッセイ……手代木俊一  
・書評……長畑俊道  
・第13回大会プログラム・報告…伊東辰彦

## ★第14回大会予定

日 時：2014年5月31日(土) 10:00-16:30  
会 場：日本キリスト教団札幌北光教会礼拝堂  
〒060-0042 札幌市中央区大通西1-14  
テーマ：仮題「北海道のキリスト教音楽」

## ★会員出版物の案内・募集

- ・林正樹著『聖歌・讃美歌の宣教思想』かんよう出版 2013年1月
  - ・CD: 水野隆一指揮、関西学院聖歌隊によるドイツ・コラール集《感謝に満ちて》  
コーベックス 2013年5月
- ※編集委員会より  
会員の最新刊行物を掲載し、皆様にご紹介したいと思います。編集委員(手代木、佐々木宛)までお知らせください。

## ★会費納入のお願い

会の運営に対して、いつも支援をいただき感謝申し上げます。2013年度会費をまだ納入されていない方は、ぜひ下記の口座にお振込みくださいますようお願い申し上げます。

### キリスト教礼拝音楽学会

郵便振替口座 02240-3-46335

入会金：3,000円(入会時のみ)  
年会費：正会員 6,000円  
準会員 3,000円  
賛助会員 20,000円

- 振込用紙には\* \_\_\_\_年度を必ず明記の上、ご送金ください。
- 住所変更等も、ぜひお知らせください。
- 会費納入についてご不明なことがございましたら、下記にご連絡をお願い申し上げます。

会計担当 佐々木しのぶ  
〒980-0023 仙台市青葉区北目町6-6-1401  
(部屋番号が1101から1401に変更になりました)  
TEL/FAX 022-262-6565  
Email:sshinobuorg@ybb.ne.jp

